



Title	ポスト社会主義ロシアにおける呪術復興の民族誌
Author(s)	藤原, 潤子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58781
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	藤原潤子
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第50号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ポスト社会主義ロシアにおける呪術復興の民族誌
論文審査委員	主査 教授 武藤洋二 副査 教授 生田美智子 副査 教授 細谷昌志 副査 助教授 千葉泉 副査 助教授 住村欣範

論文の内容要旨

本論文は、ポスト社会主義ロシアにおける呪術の復興についての文化人類学的研究である。その目的は、現在、呪術をめぐる人々の間でどのような会話が交わされているのか、呪術についての知識がどのように流れているのかを、北西ロシアを舞台として民族誌として記述すること、呪術をめぐる語りが現代ロシアの社会的コンテクストとどう結びついて生じているのかを明らかにすることにある。本論文の基礎となったのは、2002～2004年に筆者自身によって行なわれた現地調査(計3回)である。具体的な調査地はロシア連邦カレリア共和国、アルハンゲリスク州、及びペテルブルグ、主な調査対象となったのは、人口的に多数派を占めるロシア人である。

現代ロシアは、ソ連時代の史的唯物論・無神論教育、あるいはそれ以前の近代化政策によって、「呪術は迷信である」との言説を誰もが知る社会である。しかし、呪術のプラクティスは消滅したわけではなく、社会の周辺部で生き続けてきた。そのため、「呪術など信じない」という者もまた、何らかのきっかけを経て呪術のコスモロジーに引き込まれうる社会である。社会主義時代に無神論教育を受け、それを当たり前として育ってきた人々が呪術のコスモロジーに入っていく場合、呪術についての語りは必然的にソ連時代への評価を含むものとなる。現在の視点から呪術が禁じられていた過去との間にどのような交渉が行なわれるのだろうか。過去の自分及び自分を取り巻いていた環境はどのように解釈しなおされ、過去が語りなおされていくのだろうか。筆者が本論文で行なったのは、彼らの会話を通してその過程を明らかにすることである。新たに創り上げられてゆく呪術の「伝統」が、いかなる理由付けによってリアリティをもったものとして人々に受け入れられていくのかが記述された。

これまでのロシアの呪術研究においては、呪術はもっぱら過去の残存とみなされ、「失われた伝統」

の再構築の志向が強かった。そのため、マスメディアを通じた呪術師の活動や「科学」を装った語り口などの現代的要素は、記述対象から排除される傾向にある。しかし、本論文は現代を語るものとして呪術をとらえなおし、マスメディアや「科学」的語り、さらに「伝統」についての研究成果を一般に還元しようとする研究者自身の活動をも記述対象とした点に特徴がある。本論文は、現代ロシアにおける呪術の現状についての基礎的資料として位置付けることができるだろう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ポスト社会主義ロシアにおける呪術の復興についての民族誌である。

著者自身の現地調査に基づく本研究は、まず、ソヴェト社会主義体制崩壊という世界的激変の11年から13年後の時点におけるロシアの呪術とそれをめぐる状況についての重要な資料としての価値をもつ。

ロシアにおける従来の研究では、呪術の失われた部分の再現をめざし、そこへ侵入している現代的要素を、不純物として取り除いていった。著者は、これとは逆に、呪術の内容と扱い方における現代的変化を調査と考察の対象にして、文化人類学的研究をおこなった。

呪術の現代的変身は、この太古からある療法が生き延びより深く生活の中に入り込むための必要性から起こる。敵であるはずの科学を呪術が味方につけ、科学的解釈という呪術にとって極めて危険なものによって自己を正当化し補強する。ソヴェト時代では科学的説明によって「迷信」の退治が試みられたが、ソヴェト崩壊後は、科学が「迷信」のために動員される。体制の変換が呪術と科学の関係を逆転させる現象を産み出したことを著者は正確にとらえている。

ポスト社会主義という新しい状況、生存条件が、呪術に新しい性格を与えたことを、著者は現地調査、当事者との詳しい面談によって示す。このさい、たとえば、著者は、呪術など全く信じていなかった者に、「災い」をきっかけとして呪術のコスモロジーが発動する過程を、悲惨な人生を歩んだある女性の具体的なライフヒストリーの形で示し、このコスモロジーを受け入れた女性が呪術を「隠していた」ソヴェト権力を呪うことを伝え、ソヴェト崩壊の前と後における呪術にたいする価値判断の変化を個人の次元で捉えることにも成功している。

医療費を負担できない貧困層が「実用としての呪術」を必要としており、この状況下で呪術師が治療師と自称するようになったこと、呪術がビジネス化するという呪術史上の新現象がとらえられている。

秘術のマスメディア化および秘術と科学との新しい関係についての考察は、ロシアだけでなく21世紀における伝統的医療の運命について示唆するところが多い。

従来、呪術研究は、呪術習俗が社会で一元的に受容されている社会（アフリカなど）に集中してきた。ところが、本論文は、近代化が浸透し、呪術に関して多様な立場が混在するタイプの社会を対象にしている。ここにも研究の新しい意義がある。

著者は、伝統的な呪術空間である村のみならず、都市やメディア空間も射程に入れながら、これらの空間が交錯して呪術習俗が再生しつつある過程を論じて、呪術習俗の現

代版を適格にとらえている。

伝統的な「フォーク＝俗民」だけでなく、呪術を「対象」とする立場にある「研究者」をも呪術習俗生成過程における積極的主体ととらえ、彼らの行動も分析の対象に含めるという視点は独創的で興味深い。

本論文は、また、呪術がロシアの社会において復興しつつある状況について、それが、いかに「伝統」として認知され、普及されるかという観点から分析がなされている。この点も、本質主義的な文化記述を疑問視し、文化が構築される過程を重視する近年の文化人類学の研究動向を十分に踏まえたものであり、高く評価できる。

本論文は、ロシア地域研究と、文化人類学的な理論のロシアの文化状況への応用の面で新しい知見と地平を開いたものであると評価できる。

以上のように、本論文は、新しい意義をもつ優れた研究であるが、以下のような欠点も指摘しなければならない。

ポスト社会主義<その後>を考察の場にしたら限り、ソヴェト社会主義<その前>とは何であったかという知識と見識が要求される。理論や建前としての社会主義ではなく、歴史的現実としての社会主義を、ソヴェト崩壊後に露になった事実の分析、考察によって、新しい次元で把握することが現時点での学術論文には求められる。著者は、ポストの現象を、ポストという表層の下に広がるソヴェト社会主義国家との関係で考察、説明するという作業を十分に行なっているとは言えない。

本テーマとの関係で重要な「無神論」も、歴史的状況によって政策の次元では様々な現われ方をする。その具体的な変化、変身をつかまえないで、無神論国家という観念的な枠組みに問題をいれてしまう傾向がみえる。

ロシアの呪術にはギリシャ正教が「埋め込まれている」(43頁)。ポスト社会主義期における呪術の運命の変化をたどるには、社会主義時代に正教がおかれていた状況、ソヴェト権力の宗教政策と個々の政治状況に合わせたその実践の変化との理解が不可欠である。著者はソヴェト体制下の宗教政策については、自分の研究がなく、廣岡正久の著書をたどって簡単な概観をするだけに終わっている。しかもこの著書にたいする価値判断も示されていない。

本論文のテーマ呪術との関係で、ソヴェト権力による伝統的農民文化の破壊を出来るかぎり一次資料に基づいて追求するとともに、ソヴェト崩壊後に明らかになった諸事実を収集、検討する必要がある。

フォークロア研究に関しては、「農業集団化が始まった後に事態は変化する。」と指摘し、「ソヴェト・フォルクローは、共産主義の理想についての効果的なアジテーションとプロパガンダの一部をなすようになった〔Sokolov1950〔1938〕:141〕。」(112頁)と引用によって答える。さらに、農村共同体で「共有されていた民衆文化は破壊の対象となった」(113頁)と、農業集団化のための伝統的農民文化の破壊という本論文にとって極めて重要な問題が、いわば、問題の題名が示されただけで閉じられる。1930年代に入ると呪術研究が禁じられる(113頁)理由も「呪術は前時代的な無知と遅れを象徴するものとして、研究価値を認められなかった。」(113頁)と、当局の説明の次元で処理されている。集団化の場から元の伝統的農民文化へ帰ることを不可能にする、

戻る場を奪うという歴史的文脈の理解とその具体的提示が無い。

呪術の個々の研究に対する禁止が検閲の存在によって説明されているのも上記のことと同じ水準である。検閲させる根本的原因への言及がない(113-115頁)。

著者は「災因論」という視点を設定している。「災因論とは、すでに生じた出来事について、遡及的に記憶を構築する語り口である」。(18頁)しかも、「災因の語りはソ連時代についての記憶を構築する語りとなる」。(18頁)「呪術のコスモロジーの発動に伴う過去像の変化——これを記述することが、本稿での課題である」。(18-19頁)、と目的が設定されている。だからこそ、本論文ではポスト以前の状況の把握が重要な意味を持つ。上記の理由で、ソヴェト社会主義における災因とポスト社会主義における呪術との相関の展開が不十分である。

ソヴェト時代における呪術習俗の「衰退」を示唆する実証的な情報提示がない。ソヴェト崩壊後の「呪術復活」という仮説を証明するために、ソヴェト時代の呪術衰退という結論を、不十分な根拠のもとに、既成事実として導き出しているという印象をうける。ソヴェト時代の呪術の実態に関する実証的調査が望まれる。

呪文に関する資料とその分析に考察が集中し、その分、呪術に不可欠な構成要素である儀礼と神話に対する考察が希薄である。特に北ロシアの呪術を考察する際に、呪文と神話の関係への言及が欠けていることがおしまれる。現代社会の状況としてのマスメディア空間に注目し、そこでのさまざまな呪術的言説を考察するのであれば、言説の「物語性」についてもっと明確に論点を浮かび上がらせるべきであって、呪術と科学の対比という従来のパラダイムだけでは呪術の本質はとらえられない。呪術には実的手段の面だけでなく、当人が意識されない形での儀礼的で表出的な要素が多分に存在するからである。シンボル性において呪術をとらえるのが現代の呪術理論一般の趨勢と思われるが、その点への配慮が本論文には見えてこない。

上記のとおり藤原潤子氏の論文の長所と短所を厳密に検討した結果、本審査委員会は、一致して、本論文がロシアの呪術研究における新しい成果であり、博士の学位を授与するにふさわしい業績であるとの結論に達した。